

日置黙仙と忽滑谷快天よりみた仏骨奉迎

川口 高風

日置黙仙の紀行法話

日置黙仙（一八四七一―一九二〇）と忽滑谷快天（一八六七―一九三四）は、明治三十三年五月の仏骨奉迎に曹洞宗を代表して奉迎使及び随行員として暹羅国へ派遣された人である。両師には奉迎に関する報告書ともいえる紀行法話や日記があり、それによって奉迎の詳しい様子と感想などをながめてみよう。

日置には『暹羅紀行法話』がある。これは日置が渡暹し、帰国後の明治三十三年八月十八日に可睡斎（袋井市久能）で行われた慰労会席上での法話である。同年九月十五日に発行されているところから、仏骨奉迎の報告書としては岩本千綱・大三輪延弥『仏骨奉迎始末』（明治三十三年七月 岩本千綱）に次いで、二番目の刊行書となる。しかし、本書は日置の著作にあげられておらず、（高階瓏仙『日置黙仙禅師伝』（昭和三十七年十一月 大法輪閣）三六七頁）従来は知られていなかったようである。それは可

日置黙仙と忽滑谷快天よりみた仏骨奉迎

睡斎に設けられた仏骨奉迎使慰労会事務所よりの自費出版であったためと思われる、編輯兼発行人は白鷺洲喚三、印刷所は静岡県小笠郡掛川町二藤五百三番地の掛川活版所となっている。慰労会での法話を横山徳門が速記したもので、それに小塚仏宗、高楠順次郎の学説を参考として校訂増補し、それを活字化して有志者に頒けたものである。巻首には同年七月二十五日に本邦駐劄暹羅公使が可睡斎へ一泊した時、日置へ寄せた文を序文としている。

編者の白鷺洲は、慶応元年（一八六五）七月十二日に名古屋市栄町の彫刻師森辰蔵の三男に生れ、幼名は長次郎と称した。父の遺言により出家し、明治六年三月には想慈院（御前崎市新野）十七世の白鷺洲広禅について得度し養嗣子となった。名は誰應、喚三は号であった。同十一年夏には可睡斎の西有穆山の会下に入衆し、衣鉢侍者として同十八年三月まで随侍した。なお、同年七月には広禅の室に入って法を嗣ぎ、同十九年、曹洞宗大学林に入學して同二十二年九月に卒業後、曹洞宗務院書記となり、同三十五年には財務部主事に進み、後に准師家として大洞院僧堂に勤務した。また、静岡県第九宗務所長にも就いている。その間、同二十四年十月には想慈院十八世に首先住職し、同三十年には開山堂を新築し書院、方丈も再建して梵鐘を鑄造した。同三十八年四月には増仙寺（浜松市天竜区両島）十八世に転住しており、私立遠南慈善会長として慈善救済事業にも尽しており、行持面密であった。大正四年には曹洞宗宗会議員に就いており、昭和五年六月十七日に六十七歳で示寂した。（安藤嶺丸『曹洞宗名鑑』（大正五年

一月 壬子出版社）一七九頁）『暹羅紀行法話』を編輯した頃は、想慈院住職で曹洞宗務院に勤めていた頃である。

法話は大きく三つに分けて述べられている。

(一) 仏骨が発掘されるまでの経由。

(二) 日置が奉迎使となり、渡暹したいきさつ。

(三) 日置の今後の対処。

の三点で、その要旨をながめてみると、次のようになる。

(一)では、仏骨がいつ発掘されたか、何人が発見したかは審らかでないため、それについて弁じている。発掘主は、土地所有者でフランス人のペッペ氏が明治三十一年一月頃に開墾していたところで発見した。この地は釈尊の旧趾であったことから多数の宝物が発見され、その中に仏骨もあり、三分の一は英国龍動博物館で保管し、一分はカルカッタ博物館へ、一分を暹羅国へ遣した。そこで、暹羅国王は日本へも分骨することになった。

(二)では、分骨が駐暹公使の稲垣満次郎の発案で、日本の外務省に通知したが、当時の青木外相は国務多端により謝絶した。そこで、稲垣は大谷派本願寺に紹介したところ歓喜し、奉迎請願の旨を回答した。しかし、日本仏教は各宗各派であるため、稲垣は各宗管長に奉迎請願の旨を贈り、その結果、各宗から奉迎使を送ることとなった。酷暑の中で奉迎を行ったことが述べられ、その様子を細かく述べている。しかし、在暹中については、

此在暹中、斯クオ話スレバ愉快歡樂ラシイガ、思ノ外苦シイモノデ、僅カ一週日ナレト朝参訪問応請待賓疫疾ヲ畏レズ、

炎熱ヲ憚ラズ、日夜奔走シテ、殆ンド寢食モ違アラズデシタ。之ヲ脱白ニ謂ハシメバ、歡樂否賓客地獄ニ墜タ様ナモノデシタ。

然レト暹羅政府ハ、始終接待官ヲ附テ名勝旧趾ニ案内シテ、奉迎使一行ヲシテ十二分ノ満足ヲ与ヘラレタト申サネバナリマセン。

とあり、優待厚遇であつたという。

(三)では、帰路はシンガポール、香港などに立寄り長崎へ帰着した。その後、上陸会、拝迎会、奉迎会などの法要を行ったが、帰路中に不思議なことが二回あつたという。

その一つは香港出帆の際、天気晴朗であつたが、俄かに異変が起り、天気は不穏になった。しかし、翌朝には平穏になった。第二は長崎より神戸へ到る時、天候は悪かつたが予定通り出発した。しかし、風も雨もおさまって快晴で、神戸に着いた。

このように天候による災難を逃がれており、仏骨が日本へ渡ることになった瑞兆とも信じられていた。日本では一宗一派を論じているが、釈尊の遺骨を奉迎した今日、一宗一派とか小乗、大乘仏教とかいわず、一致団結する今日であるという。そこで、各宗が協同して日本大菩提会を組織したが、これは将来の仏教の隆盛を企図するものといっている。

暹羅紀行法話（外題）

遠州可睡齋住職日置黙仙禪師ハ、本邦仏教各宗派ヲ代表シ仏骨奉迎使ノ一人トシテ遠ク暹羅ニ航シ無事帰朝セラレシヲ以テ、這回地方有志者胥謀リ、明治卅三年八月十八日同齋ニ慰勞会ヲ設ク。其席上、禪師ノ法話セラレタルヲ横山徳門氏ガ速記セシモノナリ。今會員諸氏ノ需ニ応ジ、小塚仏宗師、高楠博士ノ説ヲ參考トシ之ヲ校訂増補セラル。依テ之ヲ活字ニ附シ以テ有志者ニ頒ツ。因ニ本年七月二十五日、本邦駐劄暹羅公使ハ日置奉迎使見送リトシテ可睡齋ヘ一泊セラレ、日置奉迎使ニ文ヲ寄セラレタリ。依テ其全文ヲ卷首ニ掲ケ序ニ替フ。尚ホ渡暹中記憶スベキ緊要ノ事項許多アリト雖氏小冊ニ尽シ難シ。今禪師ノ許諾ヲ得テ之ヲ公ニス。読者之ヲ諒セヨ。

明治三十三年庚子八月中浣

編者 誌

暹羅紀元百十九年八月二十五日。暹羅特命全權公使侯爵ビヤー、リイチロン、ロナチェト、最モ祝スル所ノ祝文ヲ日置黙仙師ニ呈ス。而シテ今日ノ席上ニ列スル一統ノ僧侶ニ至ル迄祝スル。

今日暹羅國 天皇陛下ニ対シ聖寿万安ヲ祝セラル。余ニ於テ此上モナキ喜數コトデ有ル。又今回ノ仏骨ノ奉迎ニ付、各宗ノ僧侶及其他ノ人々ニ対面シ交誼ヲ辱シタリ。此儀永遠ニ自分ノ命ノ有ラシ限リ永ク紀念トシテ忘レザルナリ。諸君モ道心堅固ニシテ仏教ノ盛ナルコトヲ勤メラレ、併セテ幾久數ク法ノ為メニ存命セラレンヲ。リツテイロング、（原文暹羅語）

日置黙仙と忽滑谷快天よりみた仏骨奉迎

暹羅紀行法話

日置黙仙禪師口演

横山徳門速記

皆サン今晚ハ。能ク慰勞会ヲ御設ケ下サイマシテ、大キニ難有御座イマシタ。生憎雨天デ、雨ハ至極結好デスガ、併シ御出ニハ御迷惑デシタロー。其迷惑ニモ拘ハラズ、一同御来会下サツタハ、予ニ於テ大イニ満足ニ思ヒマス。先ツ今晚ノ御話ハ、所謂仏骨ヲ発掘シタル来由ト、私ガ奉迎使トナツテ渡暹致シタ顛末ト、今後ノ覚悟トヲ述べ様ト思ヒマス。チト席ガ長クナルカモ知レマセン。其積リデ御聴取ヲ願マス。

偕テ、此仏骨ニ就テハ、第一暹羅ト印度ノ事ガ混交シテオツテ、チト分リ難イデゴザイマセウ。全体此仏骨ハ、暹羅ニ在タカ、印度ニ在タカト云フ事ト、其次ハ、何時之ヲ発掘シタカ、何人ガ発見シタカト云フ事ガ審ラカナラデハ、第一仏骨其物ニ信ガ置ケマセント思ヒマス。依テ先ヅ、此等ノ事蹟ヲ弁ジマセウ。

私ハ仏骨実見ニ付テ、先年大イニ便リヲ得タコトガアリマス。過ル明治十四年我大本山永平寺ニ於テ、高祖大師ノ御靈殿ガ焼失シ、間モナク再建ニ成リ、其節私ハ拝登シテ、発掘シタル御靈骨ヲ親シク拝見致シマシタ。最初思フニ、大師入滅以来既ニ六百有余年前ノ事ナレバ、形モナク姿モナク、唯タ灰ノ如キモノバカリナラント思ノ外、堅然トシテ居リマシタ。尤モ此ハ本山八代目ノ時埋メ改タモノデ、蓋ニ正シク書テ御ザイマシタナレト、埋メ方

ガ余リ完全デナカツタカト思ヒマシタ。大師ノ御骨ハ、灰ニ混テ壺ニ八分程デ、二代尊ノ御骨ハ沢山デシタ。之レニ依テ考ヘマスト、如何程年数ガ歴ル^ツ、其埋方ガ堅固綿密デアレバ、堅然タルモノト思ハレマス。

其処^{ツコ}デ今回、奉迎使トナツテ渡邇シ、其来歴ヲ聞クニ、此仏骨発掘ノ地ハ、古昔^{ムカシ}釈尊御誕生マシ^ムタル迦毘羅^{カピラ}国、今ハ迦維羅跋^{カピラバツ}ト云フ国デ、此地ハ彼ノ有名ナル仏陀伽耶^{ブツガヤ}ヨリ北ヘ三十里程汽車デ過ギ、下車シテ又タ八里許^{バカ}リノ処ニシテ、其辺ハ皆ナ森々タル深山幽谷ニテ、虎^{トラ}ヤ狼^{オホカミ}ノ沢山棲息シテ居ル地ト申ス事デ、其処迄ハ非常ニ困難デ、容易ナ事デハ行ケヌソーデス。此所^コヲ今ノ迦維羅跋ト申スノデ、玆ニ「ペポナン」ト申ス地ガアツテ、其中ニ釈尊ノ御父君ナル淨飯大王ノ城趾ダト申ス場所モアリ、釈尊ガ御說法ナシ玉フ彼ノ祇園精舎ノ古跡トモ申スベキ地モアリ、其隣邦ニシテ、英領印度ノ「ニポール」領ニ近キ処ノ「ピブラーヴ」ニシテ、「ゴラクプール」ノ東ニ在リ。北緯二十七度二二、東経八十三度九ノ地デ、コ、ニーノ盤石ガアリ。古来ヨリ釈尊ノ産^{ウツ}殿^ヤノ礎石^{イシ}ダト言ヒ伝ヘテ居ルガ、即チ此所デ御ザイマス。而シテ其発掘主ハ、土地所有者仏国人ベッペ氏ト申シマス。西歴一千八百九十八年即チ吾明治三十一年一月ノ頃、地主ベ氏ハ此地ヲ開墾セントスル折柄、憶フニ此地ハ古来ヨリ釈尊ノ旧趾ト云ヒ、殊ニ丘廟ノ如キハ、尋常普通ニモアラズ。其高サ凡二丈一尺モアルモノナレバ、平素学者輩ノ評スル如ク、若シ発掘モセバ、何カ古学上ノ考ヘ仏教徒ノ便リトモナリテ、世ニ大ニ利益ヲ与フベキ物ガナシ

ト申セヌ。寧口発掘シテ見ンモノト、一日ベ氏ハ之ガ探掘ヲ驗ミルニ、子ツカラ一物ノ現出セン様子モナク、一時ハ中止セント迄思ヒシガ、併シ一旦研究上企テシモノヲ此俟ニ中止スルモ残念ト思ヒ、更ニ進テ掘ルコト凡ソ十九間許リモ下ガルト、鳥渡煉瓦様ノ物ガ露ハレ、夫ヨリ尚ホ数尺掘下ゲルト、果シテ何物カ現出シマシタ。其有様及其物品ヲ聞クガ俟ニオ話申シマセウ。

真先キニ煉瓦造リノ大塔ガ出デ、其中ヨリ一ツノ石龕ガ顕ハレ、其石龕ノ蓋ヲ取テ視ルト、サテ意想外、大層ナル宝石及種々ナル珍物ガ出マシタ。先ヅ

第一ニ、御骨ヲ納レタル蠟石ノ壺デス。其壺ノ蓋ニ刻セル彫文ガアリマス。此ハ釈尊御涅槃後二百年程経テ阿輸迦王即チ阿育王ト申ス天子ガ、広大ナル塔ヲ建テラレ、其時代(紀元前二百五十年)ノ文字デアルト研究ノ結果申スノデ、此ヲ巴利語ニ訳シマス「薄迦梵^{バキヤボソ}仏陀ノ遺骨ヲ藏ムル事、聖龕ハ釈迦族即大聖(名声高キ人)ノ兄弟姉妹、ソノ兒子妻室等ノ所有ニ属ス。」(高楠曰ク。此文ヲ用ヒタル方言ハ、古ノ摩迦陀^{マカダ}語ニシテ、阿育王時代若クハ其以前タルハ疑ナシ。或ハ仏滅後間モナク彫刻セシモノタルモ知ルベカラザルナリ。)ト申ス事デス。

第二ニ其附属物デス。此ハ実ニ、他ニ類ヲ見ザル豊富ナル発見物デシテ、数百点ノ多キニ達シタル物デスカラ、一々ハ挙ゲラレマセンデ、其重要ナルモノノミヲ列シマスレバ、先ヅ一ニ黄金薄板数枚(獅子ノ立像ト両箇ノ梵字)、二ニ黄金星章(牛像)、三ニ黄金星章(鈍形ノ八角)ト(尖形ノ八角)、四五ハ水晶製ノ諸華葉

ガ数十種、六ニ寶石ノ三宝章（三宝トハ仏室法室僧室ノ事デ、之レニ像^{カク}ドリタル物ガ両個）、七ニ銀製ノ俱利迦羅章（真言宗デ用ユル法器）、八ニ宝製ノ鳥様ノモノ、九ニ金屬製ノ矢張鳥様ノモノ、十二金製ノ十字章、十字章ハ耶蘇教徒ヨリ外ハ用イヌ様ニ思マスガ、之ヲ見ルト、原ハ全ク仏教ヨリ出タニ相違アリマスマイ。経論ニ拠テ考ヘテモ、大ニ当ル所ガアリマス。併シ是ハ一ツノ問題デ御ザイマセウ。十一ニ黄金製ノ人像（薄板）、十二ニ黄金製ノ象像（薄板）、十三ニ黄金ノ薄板卅字章ガ両様、十四ニ珊瑚^{サロ}ノ断片数種、十五ニ天人様ノ像（黄金薄板製背ニ後光ガアリ、恰モ観音様ニ似タモノ）、其他黄金製ノ各種寶石類ノ諸種ヨリ、或ハ念珠ノ如ク絲ヲ貫^{トス}スモアリ。絲ヲ着ケヌモアリ。種々様々ノ宝物ガ、沢山有リマシタソデス。凡ソ古墳ヲ発掘シテ、此レ程結好ナル発見物ノ出タ事ハ、古来ヨリ五大洲中ニナイト申ス事デス。若之ヲ一々調査シマシタナラバ、人種学、宗教学、古学等ノ上ニ資スルモノ沢山ナノデ御ザイマセウ。

其処デ、ペ氏ノ思惟^{シユイ}セラレルニ、是ノ如ク多数ノ発見物、殊ニ仏骨マデモ出デバ、徒ラニ自家ノミニ保存スルヲハ、実ニ恐怖ニ堪ヘザレバ、先ヅ之ヲ英国 女皇陛下ニ献貢センモノト。此ニ条件ヲ附ケテ上奏セラル。其略ニ云ク、臣今マ此ノ発見物ヲ出セリ。陛下願クハ、此蠟石ノ壺中ニ納ル所ノ仏骨ハ、当今世界唯一ノ仏教王タル 暹羅國王ニ贈ラセラレ、而ノ此附屬物ハ三分シテ、一分ハ英国龍動博物館ニ保管シ、一分ヲ仏ノ本国タル印度ノ甲谷^{カルカッタ}ノ博物館ニ収メサセラレ、一分ハ下臣ガ勞シテ之ヲ採掘シタルヲ以

テ、我子孫ニ伝ヘシヲ懇願スルトノ旨ニ依リ、英国政府ハ速ニ此建言ヲ容レテ、陛下ニ上奏セラレナバ、陛下ハ之ヲ嘉納シ玉ヒ、直ニ願者ノ意旨ニ任セ、勅使ヲ暹国ニ遣シ、仏骨ハ皆ナ 暹王ニ贈リ、附屬物ハ三分シテ建言ノ如クニ取扱ハレタト申ス事デ御ザイマス。

其所デ、暹羅國王ハ其通牒ニ接シ、歡喜ノ以テ比ス可キナク国務大臣ヲ会シ、遂ニ勅使ヲ印度ニ遣ハシ、国家ノ重要ナレバ、多額ノ国金ヲ費シテ、之ヲ暹都盤谷府ニ奉迎セラレタノデ御ザイマス。此盤谷府ト申ス所ハ、平坦ナル土地デスガ、這回仏骨殿新築ノ為ニ、特ニ外ヨリ土ヲ運搬シテ一小岳ヲ築カレ、其大イサ我東京ヲ以テ例セバ、宛然^{テウダン}愛宕山程ノ高サデス。其上ニ美麗ナル高塔ヲ建テ、之ニ仏骨ヲ奉祀シテ御ザイマシタ。其費額ヲ聞ケバ、殆ンド五十万円余ト申ス事デス。

偕テ、又タ他ノ印度緬甸^{ビルマゼイロン}錫蘭等ハ矢張仏教国デ、殊ニ英領デスカラ、何レモ本国政府ヘ 暹王ニ御附与ノ如ク拝戴致シ度旨ヲ願出マシタガ、英国政府ハ、既ニ仏骨ハ皆ナ 暹王ニ贈与セラレタルニ依テ、此願意ヲ容ル、ト同時ニ、勅ヲ駐暹英公使ニ下シテ、領土ナル緬甸、錫蘭ハ仏骨ヲ分与セラレ度旨ヲ、暹王ニ請ハレタルニ、暹王ハ喜デ此請ヲ受ケ、何レモ各公使ノ手ヲ經テ御分与ニナリタト申スコトデス。於之我駐暹公使稲垣滿次郎氏謂ヘラク。我日本国モ千有余年前ヨリ、上ハ 天皇陛下、下庶人ニ至ルマデ、仏教崇信ノ国デアル良シ。仏骨領与ヲ願ハバヤト旨ヲ吾外務省ニ通牒サレタルニ、青木外相ハ至テ冷淡ニシテ、刻下国務ノ多端ヲ

以テ謝絶セラレ、彼ノ英国政府ノ如キ比ニアラザレバ、稲垣公使ハ之ヲ先ヅ縁アツキ大谷派本願寺ニ紹介セラル、ト、大谷派本願寺ニ於テハ、歡喜措クナク、直ニ奉迎請願ノ旨ヲ回答セラレタリ。ソコデ公使ハ、之ヲ暹国政府ニ手続ヲセラレタルニ、陛下ノ勅旨ニハ、日本ノ仏教ハ各宗各派アリト聞ク。一致合同シテ奉迎セントナラバ、速ニ頒与シ呉レント。是ニ於テ公使ハ、書ヲ各宗管長ニ贈ラレタノデ御ザイマス。ソコデ各宗派ノ管長ハ、当春京都ニ開議シテ確然仏骨奉迎スルノ決シ、奉迎使ハ真言、淨土、臨濟、曹洞、日蓮、真宗ノ本派、大派、ヨリ各一名宛皆デ七名ノ答デアツタガ、爾後真言宗ハ宗内紛擾ノ為ニ之ヲ辞シ、淨土宗ハ意見衝突シテ合同奉迎ハ断ハリ、日蓮宗ハ差定人遽ニ^{ニカ}発病デ行ケズ。結局真宗両派デ二名、臨濟、曹洞デ二名ト確定致シマシタ。此四名中デ正使一名ヲ互選スルヲトナリ、遂ニ東本願寺大谷光演師ニ当リ、乃チ全国十三宗三十三派ノ信任（信任状ハ各宗管長連署）ヲ受ケテ、愈々本年五月廿三日ニ、一行十八人ハ日本郵便船ニ乗込ミ、神戸港ヲ解纜致シタノデ御ザイマス。

偕テ、船中デハ酷暑デ堪ヘ兼子マシタガ、幸ニ一行ノ内一人モ魔事ナク、香港ヲ經テ新嘉坡^{シンガポール}ニ至リ、此地デ支那船ニ転乗シ、船長ハ英人デ、日本ヘモ来タ者デアツテ、親切ニ扱ヒ呉レマシタガ、船中ノ不潔ニハ閉口デシタ。漸ク六月十二日午前十時ニ盤谷府ヘ無事着船シマシタ。此時、在暹ノ岩本千綱ト云フ人ガ来テ申サル、ニ、未ダ歡迎準備モ調ハズ、船ニ一泊セラレ度クト。無止茲ニ一泊シマシタガ、船モ進行中ハ風モ少シハ這入リマスガ、此碇

泊中ノ暑サハ実ニ耐ヘラレズ。寒暖計九十八九度、オマケニ風ハ少モナシ。誠ニ焦熱地獄ノ思ヲ致シマシタ。茲ニ湄南江^{メナム}ト云フ川ガアツテ、其河迄暹羅文部省ヨリ出迎ノ小蒸汽船ガ参ツテ、一同ハ之ニ搭シテ、府ヘ上陸シマシタ。此時在暹日本公使書記官書記生及公使館附ノ警部等数名ハ乗船迄出迎ハレ、波止場ヨリハ馬車ニテ、先ヅ「パレースホテル」ヘ着キ、昼食了テ大谷、南條両師ハ日本公使館ニ、其他ノ奉迎使ハ「オリエンタルホテル」（盤谷府第一等ノホテル）ニ、随行諸氏ハ「パレースホテル」、一行ノ者ハ三所ニ宿シテ、午後ハ奉迎使一同公使館ヲ訪ヒ、稲垣公使ニ面会シ打合ノ上、公使ノ誘導ニテ馬車ヲ驅リテ文部、外務、陸軍ノ三大臣及參謀總長ヲ訪問シマシタガ、何レモ玄関迄出迎ヒ、丁寧ナル優待デシタ。暹国デハ別ニ教部省ハナク、寺院ノ事ハ皆ナ文部大臣ガ扱ハレ、所謂文教一致ノ様子デス。翌十三日ハ、午前ニ文部大臣日本公使館ニ来ラレ、昨日ノ答札デシタ。午後ハ文部書記官ノ案内デ盤谷府南方仏教新派ノ「ワットブロンスリン」寺ニ抵リ（新派ハ、今ヲ距ル五十年前先王ノ創設ニ係リ、寺院ノ裝飾儀式ト僧服ハ異ナツテオル）釈尊ノ大像ヲ拝シ、高塔ヲ縦覽シ巴利語学校ヲ參觀シテ、帰途ニハ工部大臣及盤谷府知事ヲ訪問シ、文部大臣ノ招キニ応シ饗ヲ享ケマシタ。十四日ハ午後ニ陛下ニ謁見ト申スノデ、宮内省ヨリ三台ノ馬車ヲ廻サレ、公使及一同ハ随行迄参内スル事トナリ、茲ニ我国ト異ナル事ガアリマス。其ハ今回随行ノ諸氏ハ、藤岡、高島ハ学士ノ肩書モアレバ、同ク謁見ノ榮ヲ賜リ度旨ヲ文部大臣ニ上奏ヲ願ヒマス、陛下ノ御

質問ニ、日本デハ肩書アル者ニハ 陛下ノ謁見ヲ賜フカ。且ツ本人等ハ参内致シタ事ガアルカトノ御尋ニヨリ、兩人ハ未参内ノ旨ヲ奏シマシタ。暹国ノ法ハ、タトヘ肩書ガ有ツテモ俗人ハ相叶ハズ、僧侶ナレバ皆ナ参内セヨトノ御意デシタ。其所デ僧侶ハ残ラズ参内ガ出来ルノデ、各奉迎使ハ稲垣公使ト同乗シ、随行諸員モ他ノ馬車デ隣々ト車輪ヲ輾^キラセテ王宮ノ正門ヨリ入ルト、近衛兵ハ左右ニ排列シテ捧銃ノ礼ヲ行ヒ、各奉迎使ハ宮内、文部二大臣ニ誘ハレテ「グラントバーレス」ニ入り、王宮ハ西洋風ノ石造ニテ宏壯輪奐^{マツシヨク}、大臣ハ皆握手シテ先ヅ休憩室ニ於テ茶ヲ供セラレ、其際宮内大臣ノ詞バニ日暹両国ノ間、同一ノ人種、同一ノ宗教ヲ奉ジナガラニシテ、互ニ自国ノ語ヲ以テ談話ヲ通ズル能ハズシテ、他ノ英国語ヲ藉リテスルハ、慙^ハハレマシキ事ナラズヤ等ノ談ヲ聞キ、坐口ニ感情ガ浮ビマシタ。暫クシテ謁見室ニ入レバ、暹王ハ闕ヲ排シテ履声高ク軋リテ出御シ玉ヒ、胸問ニ各国ノ勲章数個ヲ帶ビ、盛装儼然威儀堂々一見人ヲシテ仰視ニ堪ヘザラシムノ有様デシタ。先ヅ文部大臣ハ（英語）奉迎使来暹ノ旨ヲ上奏セラレマスト。国王陛下ハ大谷正使ニ仰セラル、（英語）。貴師ハ日本デ生レ乍ラノ出家ト云フガ、血統ノ出家得道デアルカト。直ニ南條氏ハ正使ニ代テ御答ヲ申上ルト、陛下ハ御承知ナサレズ。更ニ光演師ニ御問ヒデス。光演師ハ（日本語）御答申サル、ト。之ヲ南條氏が英訳シテ、陛下ニ申上ル。陛下ハ握手遊バサレ、次ニ藤島師ニ仰セニ、同一ノ真宗ニ東西ノ別アルハ如何ナル訳ケゾト。師ハ其次第ヲ答申サル、。次ハ前田師ニ、貴師ハ如

日置黙仙と忽滑谷快天よりみた仏骨奉迎

何ナル宗旨デアルゾト。師モ亦タ簡單ニ答申サル、。次ニ私ヘ阿師^{アナタ}ハ菜食精進食ノ身デアルト申スガ、菜食ハ緬甸錫蘭ニモアリマスト握手遊バサレ、玆ニ礼ヲ了テ、後チニ謁見ノ旨意ヲ文部大臣ガ英語デ述ラレ、我等一同ハ日本語デ旨ヲ述ベマスト。之ヲ南條氏が英訳シテ答申セラレマシタ。先ヅ 暹王勅語ノ大意ハ、大覺世尊ノ神聖ナル遺形ノ一分ヲ受領セントテ、日本仏教ヲ代表シテ始メテ此国ニ来レル奉迎使ヲ見ルコトハ、朕ノ深く喜ブ所ナリ。日暹両国万里隔絶シテ、制度習慣異同ナキニアラザレト、同宗教ヲ信奉シテ、同教国ナルヲ信認スルヲ以テ、朕ハ滿腔ノ歡喜ト満足ヲ以テ、朕ガ熱心ヲ示ス。卿等請フ、之ヲ諒セヨ。卿等ハ朕ガ仏教ノ先導者ニシテ保護者ナルコトヲ承認シ、朕ハ卿等ニ、神聖ナル遺形ヲ分与スベキ幸福ナル義務ヲ尽スコトハ、親ラ喜ブ所ナリ。朕ハ日本仏教徒ガ聖物ノ頒与ヲ希望スルヲ聞カザリシガ故ニ、今日ニ至ルマデ渠等ニ此神聖ナル真実ノ遺形ヲ授ケザリシナリ。然レト、今ヤ此貴重ナル聖物ノ一分ヲ得テ日本ニ奉安シ、巡拝者ヲシテ其便ヲ得セシメントスル卿等ノ願望ヲ信認セシヲ以テ、之ヲ授与スルハ朕ノ甚ダ喜ブ所ナリ。奉迎使ノ此国ニ来ルヤ、普通協同ノ利益ノ為メ、国家開明ノ事業ノ為メ尽瘁セラル、モノニシテ、朕ノ感謝スル所ナリ。日本仏教徒ガ海外ノ教徒ト相知リ、相交リ、互ニ知識ヲ交換シ、親密ニ交誼ヲ結びテ日本仏教ノ隆盛ニ赴クコトハ、朕ノ最モ切望

記事ト我 国王陛下ガ御遺形分与ニ当リテ印刷ヲ命ジ給ヘル文書トニヨリテ、既ニ諸師ノ知ラル、所ナルベシ。

吾大聖釈尊御入滅ノ当時ニ溯リテ御遺身ヲ頒チシ情况ヲ追想シ奉リ、今我仁慈ナル仏教国大君主ノ優渥ナル愍慮ヲ蒙リテ、御遺形ヲコ、二頒与スルコトヲ比較セバ、我等ガ宗教和融ノ聖代ニ逢ヘルコトヲ感謝セザルヲ得ザルナリ。

尊敬スベキ日本ノ奉迎使諸君ヨ。余ハ今叡聖ナル大君主陛下ノ旨ヲ帶シ、爰ニ吾世尊ノ御遺形ヲ授与スル幸榮ヲ得テ欣喜セリ。尊敬スベキ諸師ハ注意シテ之ヲ本国ニ賣シ、之ヲ藏シテ仏教徒ヲシテ普ク礼拝スルコトヲ得セシメヨ。

名譽アル尊敬スベキ奉迎使諸師ヨ。希クハ三宝ノ加護ニヨリテ、聖形ヲ持チテ幸福ニ安全ニ滞ナク帰郷セラレンコトヲ祈ル。

次ニ大谷正使ガ朗読セラレタル答辞文ハ、左ニ

爰ニ、我教主釈迦大覺世尊ノ遺形授受ノ盛典ヲ挙ゲラレ添フルニ、大臣閣下ノ懇篤痛切ナル式辞ヲ賜フ。光演等此機会ニ値遇スルノ榮何モノカ之ニ加ヘンヤ。蓋シ道ニ南北アリ。人ノ根機ニ殊別アリト雖氏、光被スル所ノ慈悲解脱ノ道ハ一ナリ。之ニヨリテ將來益日暹両国同教和親ヲ厚クシ、世尊ノ遺誠ト 大暹国王陛下ノ勅旨ヲ全フセンコトヲ希望シテ止マザルナリ。

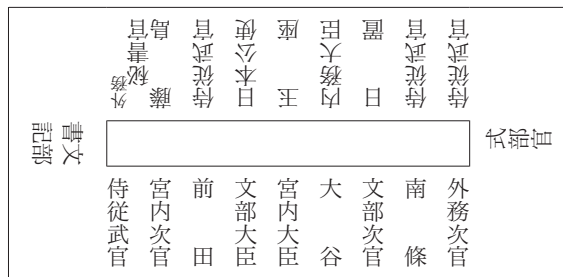
大暹国王陛下ヲ始メ文武百官諸公ノ我奉迎使等ニ對セラル、好意ハ、光演等深く感銘ス。是ヲ本国同教同胞者ニ伝達スルコトアラバ、彼等ノ欽喜シテ貴国ヲ敬愛欽慕スルノ念一層切ナルベキヲ信ズ。且ツ遺形ハ、仏陀ノ光明ト共ニ永ク護持保全シ尊重

日置黙仙と忽滑谷快天よりみた仏骨奉迎

礼讃スベシ。光演等本国仏教各宗派管長ヲ代表シ、大暹羅国王陛下ノ万歳ヲ祝シ、兼テ 陛下臣民ノ幸福ヲ祈ル。謹テ答辞ヲ呈ス。

此時、文部大臣ハ起テ合掌シテ暹羅大僧正等ニ読經ヲ請ハル。本日式場ニ参列シタル僧侶ハ、皆僧正以上ノ人ノミ。同音ニ巴利語ノ經文ヲ誦ミ、其間ハ磬鼓モ木魚モナク、各自「パーツ」ト云フ金銀線ト宝石等デ組成シ、象牙ノ柄ヲ付タル花扇（宝珠形扇）ヲ面前ニ捧持シテ之ヲ勤ラル。実ニ当日ノ一偉觀デシタ。次ニ文部大臣ハ、小金塔ヨリ仏骨ヲ出シテ奉迎使及公使等ニ示サレ、私等ハ默然三礼シテ篤ト仏骨ヲ拝覽シ、直ニ拝受シテ、予テ賣ス所ノ桐ノ二重箱ヘ奉安シ、箱ノ蓋ヘ奉迎使四名ハ嚴重ニ確封シテ、帰朝ノ後各宗管長立会ノ上開封スルコト、シテ、先ヅ式ハ畢リマシタ。翌十六日ハ、文部吏員ノ案内デ宮中内道場ノ吉祥宝寺ヲ拝觀シマシタ。本尊ハ翡翠石ノ釈迦坐像（長三尺許）、往昔隣国老槌ト戦ツタ時ノ勝利品ダト申ス事デ、其価直ヲ論ズレバ、実ニ数億万円デ暹国ヲ挙テスルモ猶足ラズト申スコトデス。又高サ數十丈ノ金塔ガアツテ黄金ヲ瓦トシ珠玉ヲ柱梁ニ飾リ、其美觀タル世界希レニ觀ル所ノモノト思ハレ、加之数千ノ瓊珞ハ、風ニ触テ鏘々トシテ音響ヲ発スル有様ハ、宛然極樂世界ニ遊ブ想ガアリマシタ。其他堂中ノ數物ハ、銀板ヲ以テ「アンペーラ」二代ヘ、猶小鉢ナル黄金仏ニ至テハ、數ヘ難キモノデス。美ヲ王宮仏殿ニ尽スニ於テハ、蓋シ宇内之レニ踰ル国ハ無カロト思ヒマシタ。翌十七日ハ、愛知阿ノ旧都ヲ參觀シテ才話申度事ハ沢山アリマスガ、

仏教上ニ必要ガタントアリマセンデオ預リニシマセウ。其翌十八日午前二ハ、在留日本人死亡者ノ回向ヲ勤メ、午后ハ宮中御陪食ノ命ヲ奉ジ、宮内省ヨリ廻サレタル三台ノ馬車ニ公使ト俱ニ乗り、宮中ニ伺候シマスト、宮内文部外務ノ三大臣ハ奉迎使ヲ出迎待合ノ間ニ導キ、暫クシテ陛下ハ寢殿ニ御シ玉ヘ、各奉迎使ニ握手ノ礼ヲ行ハセラレ、親ラ先導シテ食堂ヘ入ラセラル。其壯麗ハ驚クベキデス。当日御陪食ノ席次ヲ下図ニ示ス。其処デ、陛下ハ日本仏教ノ万歳ヲ祈リ、併テ各奉迎使ノ健康ヲ祝シ玉ヒ、食時中ハ庭前デ囀啼タル天楽ヲ奏シ、又大団扇ニテ涼風ヲ送り、賓客ヲシテ薄暑ノ氣候ヲ浮バセマシタ。食事が了ルト、別室デ珈琲ヲ賜ハリ、此時陛下ハ日本仏教各宗ヘ対シテ、金銅ノ釈迦仏ノ坐像（長三尺許）一軀ヲ賜ハリテノ仰セニ、此仏軀ハ原ト「ロース」都ノ時ノ戦利品デ、暹国特有ノ鑄造千年以上ノ古仏デアル。現時鑄造ノ技術ヲ失ヒ、今鑄造セントスルモ、復タ得難シ。是レ我国ノ重宝ナリ。願クハ他日、日本ニ於テ仏骨安置ノ殿堂出来セバ、此仏ヲ御前立ニ安置セラレンコトヲ望ムト慇懃ニ握手ノ礼ヲ行ヒ、外ニ小仏像ヲ大谷正使ニ賜ハリテ、後チ奉迎使ニ仏前ニ読経センコトヲ望マセラレ、大谷、藤島、二師ハ



偈文ヲ、前田、日置、二師ハ心経ト舍利礼文ヲ誦シ、三拝了レバ、陛下ハ龍顏麗ハシク告別ノ勅ヲ宣シ給フ。其勅語ハ左ニ、

日本仏教各宗ガ協同一致シテ、神聖ナル釈尊ノ遺形ヲ奉迎スルコトハ、朕ノ甚ダ喜ブ所ナリ。将来益々其協力ヲ堅固ニシテ、有益ノ事業ヲ興起シ宗教上ノ利益ヲ普通ナラシメ、最初ノ一念ヲ貫徹スル様ニアリタキコト、朕ハ同一宗教ヲ信奉スル上ヨリ深く企望スル所ナリ。奉迎使ハ、已ニ此地ニ於テ作スベキ事ヲ作シ了レリ。今後ハ我等ノ宗教ガ益日本ニ於テ隆盛ニ赴ク可キコトハ、信ジテ疑ハザル所ナリ。尚今後、各宗派ノ協同一致シテ布教ノ策ヲ計画スルコトニ於テ助力スベキ事アラバ、朕ガ如何ナルコトヲモ辞セザルベシト卿等ニ約束ス。

今日朕ガ日本仏教徒ヘ寄贈スル所ノ仏像ハ、今度受領セラレタル釈尊ノ遺形安置ノ処ニ同ク安置アリタシ。王后ヨリモ三蔵聖教ノ写本ヲ寄贈ス可キ筈ニテ、之ヲ入ル、錦囊ヲ手製中ナレバ、此ハ後日差送ルベシ。御遺形ハ大切ニ護持シテ、無難ニ本国ニ帰着シ、速ニ奉安処ヲ定メテ、之ヲ崇敬セラル可シ。尚海路、平安諸師健全ニシテ帰国セラレンコトヲ望ム。

此時奉迎使一同ハ、陛下ノ優渥ニ感泣シ、図ラズ催涙ニ至リマシタ。特ニ各奉迎使ヘ記念章四枚ツ、賜リ、一個ハ青銅、二個ハ銀製、他ノ一個ハ金製、各表面ニハ仏像ヲ彫刻シ、文字ニハ種々ノ由緒アルコトヲ刻シテアリマス。文部大臣ヨリハ各奉迎使、並ニ随行ノ僧侶ヘ仏像一軀ツ、贈与セラレ、外務大臣ヨリモ夫々贈品ガ御ザイマシタ。此夜、稲垣公使ハ各奉迎使一行、其他暹国政

府文武官并ニ在暹ノ公使領事貴夫人等百有余名ヲ招キテ夜会ヲ開カレ、軍樂ヲ奏シ、暹羅ノ優技ヲ演ジ、日本ノ煙火ヲ揚グ等非常ナ盛会デシタ。翌十九日、弥々一同ハ皈朝ノ途ニ上ルノ日デ、文部省ヨリ廻ハサレタル小蒸汽船ニ搭ジ、稻垣公使夫婦及文部大臣秘書官等ハ湄南江ヲ下リ、独逸船「マールラット」号ニ移ル迄送ラレマシタ。

偕テ、此在暹中、斯クオ話スレバ愉快歡樂ラシイガ、思ノ外苦シイモノデ、僅カ一週日ナレハ朝參訪問應請待賓疫疾ヲ畏レズ、炎熱ヲ憚ラズ、日夜奔走シテ殆ンド寢食モ違アラズデシタ。之ヲ脱白ニ謂ハシメバ、歡樂否賓客地獄ニ墜タ様ナモノデシタ。

然レハ暹羅政府ハ、始終接待官ヲ附テ名勝旧趾ニ案内シテ、奉迎使一行ヲシテ十二分ノ満足ヲ与ヘラレタト申サ子バナリマセン。憶フニ、若シ暹國ナカツセバ、安ンゾ仏教徒ニ対シテ、此優待厚遇スルノ国ガアリマセウカ。而シテ稻垣公使ノ周旋尽力ノ行届キタル亦与リテカアル事デ御ザイマス。

斯テ奉迎使一行ハ、其日ノ午後二時ニ汽笛ト共ニ拔錨シテ、廿四日ニ新嘉坡ニ着シ、仏蹟參拜ハ都合アリテ見合セ香港ニ寄り、此地ノ領事ガ清國目下ノ形勢ヲ語り、懇切ニ注意セラレタレバ、上海ヘハ寄ラズ。此コデ英船「ロヒラ」号ニ転乗シ、直チニ長崎ニ帰着致シタル訳デ御ザイマス。

此以後ノ事ハ、内地ノ新聞及雜誌ガ其都度報シタノデ御承知ト思ヒ略シマスガ、其法会ハ、長崎皓台寺ニ於テ二日間上陸会、大阪天王寺ニ於テ一日間拝迎会、京都東本願寺ニ於テ一日間奉迎会、

日置黙仙と忽滑谷快天よりみた仏骨奉迎

大仏妙法院ニ於テ三日間奉安会ヲ執行致シマシタ。此仏骨ハ當分ノ中、茲ニ仮リニ安置シ奉ルデ御ザイマス。到ル所法会ノ盛大ナル事ハ、實ニ未曾有ナ事デ、中ニ就テ京都ニテハ、東本願寺ヨリ妙法院迄一里程ノ途上ヘ、悉ク天幕ヲ以テ日覆ヲ設ケタルハ、喫驚ノ一ツデシテ、後デ聞ケバ天竺金巾千二百反代金三千二百円トカ云事デス。其群集ニ至テハ、人ヲ以テ京都ヲ填メタト申テモ宜カロト思ヒマシタ。嗚呼、又タ日本仏教ノ勢力モ實ニ広大ノ事デス。

偕テ、此一行中不思議ト感ジマシタノハ、香港出帆ノ際、天氣モ晴朗、海面ハ鏡ノ如ク平穩デ、望遠鏡ヲ以テ四方ヲ眺メバ、實ニ爽快デシタノニ、俄カニ船体ガ動揺シ、波濤モ異常ヲ呈シ、水夫皆集リテ種々防水ノ準備スルト云フ騒ギニナリマシタ所デ、乗客一同ハ如何ナル異変ヤアラント。大ニ不穩ノ思ヲナシ、日ハ既ニ暮レ、一天ハ墨ヲ流シタ如ク真暗トナリ、今ヤノト俟ツ内ニ、イツカ平穩ニ復シ、翌朝船長ニ之ヲ尋子マスト、船長ノ云「ニ、昨晚ハ俄カニ低氣圧ノ兆候デハ非常ノ暴風ナラント予想シタルニ、幸ニ風向ガ変ツテ日本海ニ吹行シ、船ノ無難デアッタハ大ニ不審デシタ。遂ニ無事ニ長崎ヘ着シテ聞キマスト、日本ハ非常ノ暴風雨デ家屋モ倒レ、汽車モ不通デアッタト申スコトデシタ。其次ハ、長崎ヨリ神戸ニ到ル時デシタ。天候甚ダ悪シク、地方ノ人ハ皆出發ヲ止メマシタ。然レハ日割モ既ニ定マリ、所々準備シテ待チ受ケ居ルヲ以テ、一同ハ此仏骨ヲ乗セタ船ガ転覆スル様ナ無靈物デハナイ。心配ニ及バヌト申シテ、強テ出發致シマシタ。汽

車ニ乗ル頃ハ、天モ甚タ危険ナル催シデシタガ、漸々雨モ歇ミ、風モ収ツテ神戸へ着ク時分ハ快晴デ、京阪間昇降多用ナル中ニ、一度ノ細雨ニモ逢イマセンデシタ。後デ新聞ヲ見マス、此時九州地方ハ非常ナ洪水デシタ。如是両度共危難ヲ逃レタノハ、信ジナイ者ヨリ云ヘバ好都合トカ僥倖トカ云フ迄デセウガ、信ズルヨリハ必ズ仏天ノ加護ニテ、仏骨ノ日本へ渡ラセ玉フノ瑞兆デアルト信ジテ宜シカロト想ヒマス。

回顧スレバ、仏滅後殆ンド三千年ニ垂^{ナシク}ントシテ、殊ニ文明ノ時ニ際シテ、大聖ノ御遺形ト共ニ莫大ナル宝物ヲ発見シ、西洋諸国ノ紀元前ナル活歴史ヲ実視シ、時人ヲシテ喫驚セシムルモノハ、啻ニ仏教上ノ名譽幸福ノミニアラズ。仏教國中ノ名譽幸福ニシテ、而モ世界ノ研究ニ資スル大ナル利益デ御座イマセウ。是レ単ヘニ大恩教主釈迦牟尼仏ノ饒益国土ノ賜モノト云ハズシテ、何デ御座イマセウ。

然レバ、今日此大聖ノ御遺形ヲ吾国ニ奉迎シテ、永ク此土ニ奉祀シ得ラル、ノ大幸ハ、恐レ多クモ我 明治皇帝陛下ノ御聖徳ト同胞国民ガ千有余年仏教崇信所感ノ福祉トシテ皆大歡喜スベキ一大壮事デ有ロト思ヒマス。

吾朝 欽明天皇以降、仏像經論法器僧具等ノ渡航シタコトハ、支那ヨリ朝鮮ヨリ沢山御座イマシタガ、今回ノ如ク直接印土ヨリ而モ聖物ヲ奉迎セシ事ハ空前絶後ノ椿事デ御座イマス。

今ヤ社界ハ宗教ヲ以テ邦土ノ文野ヲ論ジ、風教ニ因テ人種ノ智愚ヲ評ス。宗教研究尤必要ノ大勢ニ乗ジテハ、区々タル一宗一派ヲ

論ス可キ時ニアラズ。幸ニ南北仏教合同一致ノ時ハ至レリ。此時ニ膺^{アタリ}テ、各自祖宗ノ教団ヲ一致セバ、将来必定勃興利益ノ時アラント信ジマス。南方ノ（暹羅錫蘭等）仏法ハ小乗ヲ行ジテ戒律ヲ堅固ニ、北方ノ（吾日本）仏法ハ大乘ヲ修シテ論理ニ明晰ナレバ、互ニ相補融シ世界ノ仏教國ヲシテ一団スルノ日モ亦タ近キニアラフカト思ヒマス。

嚮キニ本邦ヘモ来マシタ印土ノ「ダンマバラ」居士ハ、予テ大菩提会ナルモノヲ主張シ世界ノ仏教ヲ一致セント図カリ、広ク世界ニ有志ノ入会ヲ勸メラレ、今ヤ各邦ニ名譽アル会員モ大分出来テ、日二月ニ盛会ニ赴キマス。本邦ニテモ、各宗協同シテ今回日本大菩提会ヲ組織シマシタ。該会ハ決シテ一宗一派ニ偏セズ、所謂普通仏教ヲ以テ成立スルモノデス。今回奉迎シタル御遺形ハ無論、此会ヲ以テ将来ノ方法ヲ組織スル事ニ各宗皆協議済ニ成テ居リマス。何レ遠カラズ本部ヨリ派出モ參ラレマセウガ、今夕御出席ノ諸君ハ、宜シク同情ヲ表シ御入会アランコトヲ予メ御依頼申置マス。今回僅カニ渡暹シテ仏骨ヲ御迎ヘ申シタ私ニスラ斯克御慰勞下サルニ、況シテ三祇百劫ノ間難行苦行アラセラレ、濟度衆生ノ大恩アル釈迦牟尼仏ニハ何ヲ以テ報フルカト云フニ他ナシ。此大菩提会ヲ興シテ、仏教将来ノ隆盛ヲ企図スルノ一事デ御ザイマス。此上ナガラ、宜シク御尽力ヲ願ヒマス。 [畢]

明治三十三年九月十日印刷
明治三十三年九月十五日発行

静岡県周智郡久努西村久能十七番地
編輯兼 白鷺洲 喚三

静岡県小笠郡掛川町掛川五百三番地寄留

印刷人 山崎 周三郎

静岡県小笠郡掛川町二藤五百三番地

印刷所 掛川活版所

発行所 仏骨奉迎使慰労会事務所

静岡県周智郡久努西村
久能十七番地

忽滑谷快天の航暹日記

昭和八年七月に刊行された「現代仏教」第一〇五号は、「明治仏教の研究・回顧十周年記念特輯号」（現代仏教社発行）として明治仏教界の各分野の様子を明らかにしている。この中に忽滑谷快天の「仏骨奉迎回顧録」がある。仏骨奉迎とは明治三十三年五月に暹羅国より寄贈された仏骨を奉迎したことで、忽滑谷は奉迎使日置黙仙の随行員として随行している。

昭和八年は仏骨奉迎後、約三十五年程経ているため、正使であつた大谷光演は病身で、随行者のほとんどが亡くなり、忽滑谷も老耄で記憶力が弱く、大部分は忘却したため年月日はあげないという。しかし、当時の忽滑谷は「教主釈迦牟尼世尊御遺形奉迎航暹日乗」と題して明治三十三年五月二十二日より七月十五日までの航暹日記を記しており、それが「宗報」第八十五号（明治三十三年七月一日）と第八十七号（明治三十三年八月一日）に掲載されている。それによつて年月日は明らかになり、本稿ではその日記を紹介してみたい。

さて、「仏骨奉迎回顧録」は忽滑谷の行動の大失態を自白したり、忽滑谷の真摯な意見として貴重なものである。仏骨奉迎が信仰に立脚しない仏事で、失敗に終わった実例として仏前に懺悔するとまで述べており、仏骨奉迎の裏面史ともいえるものである。

では、どのような理由から失敗であつたかをみてみよう。まず、暹羅公使の稲垣満次郎に対しては「東方策士」と称し、日本

を世界の中心として国際的政治経済の焦点とするような意見を盛んに発表している。しかし、それが大法螺吹ともみられていた。

それによって公使に拔擢せられ、その手腕を示すために暹羅王の意志を受けて宮廷に勢力を伸ばしてきた。そこから仏骨奉迎の大芝居を考えついたといわれる。すなわち稲垣は、仏教の篤信家ではなく信仰に立脚した仏事ではなかったのである。そのため忽滑谷は、仏骨授受式後に行われた稲垣よりの慰労会に招かれたが、仏教精神に立脚していない会のようにであったため出席しなかった。

次に、奉迎する側の仏教各宗は一致団結ができず、浄土宗は率先して脱退した。実際に動かしていたのは大谷派の石川舜台、妙心寺派の前田誠節、曹洞宗の弘津説三らの大僧政治家であったため、奉迎使一行の行列は大名行列のように華やかで、金銭には糸目をつけぬものであった。船中でも大名気分であり、途中に立寄った香港、シンガポールでも用のない所まで視察したり、一等級のホテルに泊っている。バンコクでは国賓の待遇を受け、稲垣の紹介で正副使から随行員まで王宮に招かれて暹羅王と謁見している。しかも正使は公使館、その他はホテルに投宿しており、その後の毎日は観光、歓迎責めで暹羅料理に満腹していた。そのため儉約質素を忘れていたのである。

さらに帰途の六月二十四日、シンガポールの宿泊は、日置、前田、忽滑谷が日置の旧随の一人の斡旋で、日本人の経営による旅館に泊った。しかし、そこは青楼であつたらしく、何も知らずに投宿したのは大失態と忽滑谷が衷心より懺悔している。

このような理由をあげているが、その後、仏骨は京都の妙法院に置かれたままで、各宗協同の奉安殿の建立はできなかった。しかも奉迎のために莫大な金額を費した大谷派は、寺務総長の石川舜台が不明金などで非難されて退任し、前田は妙心寺派の公金である寺班金や保存金を流用して調達したことにより刑法に触れ罰せられている。忽滑谷は稲垣の名利のための仏骨奉迎であつたのみであり、信仰に立脚していない仏事のため失敗に終つたというのである。

教主釈迦牟尼世尊御遺形奉迎航遲日乗

隨行員 忽滑谷快天謹誌

五月廿二日、払曉より送別の来客冠靴相望ともいふべし各宗委員来訪して、奉迎使及び隨行員に白色桔梗花の襟章を与ふ。又見送人へは紫色の章を附す。京都府第一号支局取締広内氏、有沢委員、長谷川百太郎氏、其他可睡の信者等別を惜みて神戸まで送らんとて来る。

午後一時、正使大谷光演師、副使前田誠節、日置黙仙、藤島了穂、三師皆七条停車場に集る。京中の老若法主一行を送らんとて来るもの千有余名もあらん。白頭、垂髻、高帽、赤帶、洋服、コート、赤毛布、競ひ競ふて一行を見んとす。停車場上等待合には大谷新門主あるを以て、送別に入り来るもの蟻の甘きに就くか如し。村田大僧正鶴骨を勞して一行を見送らる。其他本願寺役僧連枝信徒属僚等来りて別を告ぐ。

既にして一時二十分に至りて警官は列立して非常を警戒し、奉迎使を乗車せしめ汽笛一声と共に煙火を上げ、或は金龍をして突に飛ばしめ、或は桃桜をして九重の天に咲かしむ。而して本願寺中学林生徒の一隊はプラットホームに整列して捧銃敬礼をなし、樂隊も亦曲を奏して車輪の轟声に和して雄大の調をなす。此日送りて神戸に往くもの五百名と注せらる。

それより沿道の停車場に止る毎に爺嫗の合掌して汽車を拝するを見る。蓋し東本願寺の信徒なるべし。

日置黙仙と忽滑谷快天よりみた仏骨奉迎

大阪に着するや、煙火再び空を掠め見物、信者、素見、旅客一齊に汽車に向て集り觀る。人数の多きこと京都に譲らず。

二の宮駅より住吉三の宮駅に至る間、海岸を沿ふて走れば、青海原の風光言はんがたなく、白帆点々たる所、宛然白鳥の碧水に游泳するが如く大舶小舟の走るを見ては、身は車中にありて壮心早く海洋をかけ回るなり。

神戸に達するや、煙火の音は歡迎の声と和して上る。正副二使皆馬車を驅りてシヅ／＼と諏訪山なる逆旅常磐に向ふ。送る人迎ふる人、皆人車にて行き車輪絡繹として数十町に連り、鱗々の音全市を動かさんばかりなり。老幼婦女見るもの堵の如く感涙を流するもの多し。

廿三日午前九時三十分、正副二使旅館常盤を發す。予め七十余台の人車を備ふて一行を送る。京都よりは臨時汽車にて見送りの人來ること山の如く。皆波止場に整列して出發を俟ちつゝあり。奉迎使は県庁の小蒸汽船に送られて博多丸に向ひ、見送人は各大小の和船に奉送、旗を樹て尾航し、一葉の輕舟樂隊を載せて之を従ひ、長音短声波濤と共に遠く流る。本船に來りて別を告るもの髯公あり。禿頭あり。円頂あり。巾幘あり。刀圭あり。曰く。何日く何数百名の多きに上れり。

廿四日午前六時、博多丸馬関に着すれば、煙火の音に響きて九州連合奉送会なるもの数旒の幟を立て、奉迎使一行の上陸を迎ふ。午前九時、右一行は小蒸汽に遷されて門司に上陸し、正使は逆旅松延に、副使は石田に投宿せり。

廿五日晴、午後四時本船に帰る。

廿六日午前八時、博多丸門司港を発す。奉迎使相議して曰く。願くは印度に航して仏陀伽耶靈跡を拝せんと、一行の意氣益熾なり、午後三時天候、俄に変して車軸の雨甲板を洗ひ、波濤の山の如し。

廿七日晴、正午船は北緯三十度二十八分、東経百二十五度五十一分にして、寒暖計は七十二度を示せり。

廿八日晴、承陽見真二大師の御忌日なれば、一行皆精進す。此夜二等室の食堂にて法話を聞く。南條、日置二師の講演あり。此日正午、船は北緯二十六度三十三分、東経百二十一度四十八分にして、寒暖計は七十六度を示せり。

廿九日晴、正午船は北緯二十三度三十五分、東経百十七度四十四分にして、寒暖計は八十度を示せり。

三十日晴、午前六時香港に入る。奉迎使一行上陸せんと期したれども、陸上ペスト猖獗にして、遂に志を果さず。

此の日、午後猶ほ香港にあり奉迎使は、愈印度に回航すること、確定したれば、曹洞宗務局より電信為替にて千六百円を送り来れり。又暹羅なる岩本千綱より書束来着す。文に曰く、謹啓稲垣公使の依頼により左の件々御報知申上候也。一使節当府へ着の上は、直に仏骨授受に相成筈のこと、一当国王陛下は明十八日御発駕、沿岸御巡達相成候得共、来月七八日迄に還幸使節待受の筈に候こと、一右につき使節も可成速に御来着相成度旨、外務大臣より内談相成候こと。一香港御発着の節は、電信にて御通知相成度

こと。一新嘉坡御発着の節も電信にて御通知相成度こと。但し御出迎、其他の準備も有之候間、御出発の際発電には船名御示しありたし。五月十七日暹羅盤谷府岩本千綱。

卅一日晴、午前九時光演上人及び随行員上陸して市中を散歩す。日置師亦上陸す。

六月一日午前五時、博多丸香港を発す。正午船は北緯二十一度十四分、東経百十三度三十四分にして、寒暖計八十二度を示し、午後三時十五分雷雨あり。

二日午前雷雨、午後快晴、正午船は北緯十六度四十九分、東経百十一度六分にして寒暖計八十二度なり。

三日晴、正午船は北緯十二度十三分、東経百九度四十八分にし開く。藤島了穩師、先づ宗教と道德の關係を弁せられ、次に前田誠節師、仏骨奉迎の主旨を演説し、次に南條師、因縁和合の説を弁せられたり。

四日晴、正午船は北緯八度六分、東経百七度四十一分にして寒暖計八十七度を示せり。

五日曇天、正午船は北緯三度五十六分、東経百五度四十五分にして寒暖計八十四度を示せり。

六日晴、午前九時無事新嘉坡に着すれば、領事中山嘉吉郎氏及西本願寺開教師佐々木千重氏、曹洞宗釈種樸仙氏等在留日本人と共に本船に來りて歡迎し、一行はラツフルホテルに投宿す。

六月七日曇天、午前十時中山領事の招きに応じて、奉迎使一行領事

館を訪ふ。中山領事同令閨書記生等惻ろに客を接し茶菓を供す。座上奉迎使四名及び南條博士は主人の需めに従ひて揮毫の合作をなす。

八日晴、午前七時新嘉坡号に乗す。中山領事始め二木多賀治氏等見送りの為め、本船に来る同乗の舶客に暹羅王子アパコムダリコッタオングあり。王子は七年間英国に留学して海軍を攻め其成績良好にして二万五千ポンドの賞金を得たりといふ。

九日曇天、正午船は北緯五度二十五分、東経百〇三度四十四分に來りし。寒暖計八十一度を示せり。

十日午前晴、正午船は北緯八度五十八分、東経百〇二度八分にして、寒暖計八十五度を示す。午後五時より風雨あり。十時に至りて益太甚し。

十一日晴、正午船は北緯十二度三十一分、東経百度四十二分にして、寒暖計八十七度なり。午後四時メナン河口に入り、八時五十分磐谷府に達すれば暹羅王子先づ上陸す。岩本千綱、本船に來りて歡迎準備未だ成らざるが為め、一行をして上陸を見合さしむ。

十二日晴、早朝日本公使館書記二名暹羅文部大臣書記官二名本船まで出迎ひ、暹羅政府の差廻したる小蒸汽船にてメナン河を溯りて上陸するや、煙火を打上げ馬車を連ねてパレイスホテルに到る。遠藤龍眠、概旭乗二師及在留日本人來りて歡迎す。午後時、大谷光演師は日本公使館に投宿せられ、他の奉迎使はオーリエントタルホテルに投ず。午後二時奉迎使日本公使館を訪ひ、仏骨採受の準備あり。這回の奉迎使は日本政府の派遣にあらざれば国賓を

以て遇すること能はず。依りて独乙国ハイリンヒ親王來暹の時の儀式に倣ふて皇族の取扱にて式礼を行ふことゝ定めたり。同三時半奉迎使は、稲垣公使同伴して内務文部陸軍宮内の各大臣を歴訪し、八時日本公使館にて晚餐の饗を享けぬ。

十三日晴、午前九時三十分、文部大臣バスカラオングセ氏、昨日の答礼として日本公使館に来るを以て、日置、藤島二師同館に赴く。午後四時南方仏教新派の管長を訪問し釈尊の像を拝し巴理語学校を參觀し帰途内大臣及び磐谷府知事を歴訪す。同八時、文部大臣の招きに応じ晚餐の饗を享く。

十四日晴、午前九時磐谷高塔に登る。塔は暹羅先帝の築く所にして、土石を以て數百尋の大山を造り、絶頂に寺塔を建立したる者なり。寺の中央なる釈迦佛像の頂首には、我國に頒与せらるべき御骨を納めたりといふ。午後四時皇帝に謁見の式あるべく定められたれば、三時よりホテルを發して公使館に参集す。文部省官吏出迎として來着し、宮内省の馬車にて奉迎使を王宮正門より入るに、軍樂の音は車輪の轆々たるに和して起り、内大臣は大礼服にて宮庭まで出迎へ、文部大臣始め各省の大臣は階上に立ちて奉迎使と握手して先づ休憩室に導きて茶を供す、次に内大臣、文部大臣先導にて謁見室に入れば、皇帝は洋装の大礼服にて徐ろに立ちて奉迎使を見る。室内の裝飾金色爛々皇帝の盛装と共に人目を奪ふに足れり。文部大臣先導語にて奉迎使参謁の旨を奏し、次に皇帝暹語にて勅旨を宣す。要に曰く。

大覺世尊の神聖なる遺形の一分を受領せんとて、日本仏教を代

表して始めて此国の来れる奉迎使を見ることは朕の深く喜ぶ所なり。

日暹両国万里隔絶して制度習慣異同なきにあらざれども、同宗教を信奉して、同教国なるを信認するを以て、朕は満腔の歡喜と満足を以て朕が熱心を示す卿等請ふ。之を諒せよ、卿等は朕が仏教の先導者にして、保護者なることを承認し、朕は卿等に神聖なる遺形を分与すべき幸福なる義務を尽すことは親ら喜ぶ所なり、朕は日本仏教徒が聖物の頒与を希望するを聞かざりしが故に、今日に至るまで渠等に此神聖なる真実の遺形を授けざりしなり。

然れども、今や此貴重なる聖物の一分を得て日本に奉安し、巡拝者をして其便を得せしめんとする彼等の願望を信認せしを以て、之を授与するは朕の甚だ喜ぶ所なり。

奉迎使の此国に来るや、普通協同の利益の為め同家開明の事業の為め尽瘁せらるゝものにして、朕の感謝する所なり。日本仏教徒が海外の教徒と相知り相交り互に知識を交換し親密に交誼を結びて日本仏教の隆盛に赴くことは朕の最も切望する所なり。

勅語畢りて大谷光演師起ちて仏骨下賜に對する辭を奏す。文に曰く

大日本帝国仏教各宗派を代表したる真宗大谷派大谷光演、真宗本願寺派藤島了穩、臨濟宗妙心寺派前田誠節、曹洞宗日置默仙謹で言す。

大暹国皇帝陛下聖徳天の如く、高く仁沢地の如く潤し爰に優渥

なる聖慮を降し、釈迦大覺世尊の遺形を我日本帝国某等仏教者に頒与し給ふにより、各宗派管長は光演を奉迎正使に、了穩、誠節、默仙を奉迎使に撰用し、遺形奉受の任を囑托せり。光演等此任に膺り聖明に咫尺し玉牀の清爽なるを拝するを得たり。何の榮か之に加へんや。伏て望む陛下外護の力を増隆し給ひ、十善の資を保有し給はんことを光演等誠に恐懼の至りに耐へず。次に皇帝進みて、各奉迎使と握手し種々問答ありて式全く畢り、奉迎使は休憩室に退き、各其姓名及び誕辰を皇帝の姓名録に記し、官僚に送られて王宮を出て内務大蔵農務の三大臣を訪問して歸れり。

此夜七時、稲垣公使隨行員を招きて公使館にて晚餐を侑む。十五日晴、午後府内の寺塔を巡覽し、華族女學校を參觀し三時よりホテルを發して公使館に集り、公使の先導にてワットポー寺に詣れば、文部大臣同次官等迎へて仏骨授受の式場に請し入らむ。当日式場の位次左の如し。

隨行員				本尊花燈			
書記官暹	日本公使	同夫人羅	文部大臣	次官人	書記官	在留日本人	
稲垣	田	松	堀	大	佛骨塔	大	王
正	體	大	日	機	大	回	回
西	島	全	田	隆	堀	回	回

一同着席し、それは文部大臣左の文を暹語にて朗読し、次に英訳

文を読む。

恭しく彼の世尊応供正覺等大慈大聖大知識の仏陀に敬礼し奉る。
大長老并に日出の国の尊敬すべき奉迎使及び列席の紳士に頓首す。仏教の保護者たる

吾君主陛下の優渥なる勅旨に基き、余は大聖釈迦仏の御遺形を日本奉迎使諸師に授与することの御名代となりたる。余宗の大名營に就て、余の感ぜる所を陳べざるを得ず。此幸福なる機会に遭遇せることは、余自ら最も幸榮とする所にして、現時吾叡聖なる仏教君主の下に於て、吾国民が此大宗教に対する熱誠は、南北両宗の伝播せる仏教国に著明なること亦自ら誇るに足る。大聖の御遺形が如何にして発見せられたるかを縷述する要なく、又御遺形と共に顯出せる碑銘が慥かに吾大聖世尊の御遺身たるを告ぐべき要なし。

此等の事情はローヤル、アジャヤツク、ソサイチイ、の記事と我国王陛下が御遺形分与に当りて印刷を命じ給へる文書とによりて、既に諸師の知らるゝ所なるべし。

吾大聖釈尊御入滅の当時に溯りて御遺身を頒ちし情況を追想し奉り。今我仁慈なる仏教国大君主の優渥なる叡慮を蒙りて、御遺形をこゝに頒与することを比較せば、我等が宗教和融の聖代に逢へることを感謝せざるを得ざるなり。

尊敬すべき日本の奉迎使諸君よ。余は今叡聖なる大君主陛下の旨を帶し、爰に吾世尊の御遺形を授与する幸榮を得て欣喜せり。尊敬すべき諸師は、注意して之を本国に賣し、之を蔵して

日置黙仙と忽滑谷快天よりみた仏骨奉迎

仏教徒をして普く礼拝することを得せしめよ。

名譽ある尊敬すべき奉迎使諸師よ。希くは三宝の加護によりて、聖形を持ちて幸福に安全に滞なく帰郷せられんことを祈る。次に大谷光演師答辭を朗読す。文に曰く、

爰に我教主釈迦大覺世尊の遺形授受の盛典を挙げられ添るに、大臣閣下の懇篤痛功なる式辭を賜ふ。光演等此機会に値遇するの榮何ものか之に加へんや。蓋し道に南北あり。人の根機に殊別ありと雖も、光被する所の慈悲解脱の道は一なり。之により將來益日暹両国同教和親を厚くし、世尊の遺誠と大暹国王陛下の勅旨を全ふせんことを希望して止まざるなり。大暹国王陛下を始め文武百官諸公の我奉迎使等に対せらるゝ好意は、光演等深く感銘す。是を本国同教同胞者に伝達することあらば、彼等の欽喜して貴国を敬愛欽慕するの念一層切なるべきを信ず。且つ遺形は仏陀の光明と共に永く護持保全し尊重礼讃すべし。光演等本国仏教宗派管長を代表し、大暹羅国王陛下の万歳を祝し、兼て陛下臣民の幸福を祈る。謹て答辭を呈す。

是に於て文部大臣起ちて合掌し、暹羅大僧正等に読経を請ふ。而して当日、式場に参列したる僧侶は、僧正以上の人のみなればパツと名づくる金銀線と宝石等にて組成し、象牙の柄を附したる花扇を面前に捧げて読経す。洵に当日の一偉觀なりき。次に日本僧侶、默然三礼して仏骨を拝し、文部大臣小金塔より仏骨を出して奉迎使、公使等に示し、奉迎使は聖物を拝受して再び金塔に納れ、日本より賣したる桐の二重箱に奉安して式を畢れり。後に日

本人一同へ茶菓を饗して退散す。

此夜九時半、日本公使、奉迎使を招きて晚餐を侑む。

十六日晴、公使の案内にて王宮内の寺を観る善尽し美尽さるなし。帰途博物館に到り館長の案内にて巡覧一回す。珍品異材枚挙に遑なし。

午後四時、司法大臣を訪ひ新離宮にて茶菓を喫し、老嫗の仏像を見る像は金銀銅にて鑄造したる稀代の古物にして地中より発掘したるものなり。

十七日曇天、アユチャなる旧王城を縦覧せんとて、午前七時半宮内省御用の列車にて磐谷停車場を発す。行く／＼田舎の風景を見るに、眼の極る所水田相連り、其幾千万頃なるを知らず。水牛は群をなして天恵の水草に飽き、農夫は水牛を役して田を耕し、青々たる沃野蓊鬱たる深林一も吾人の心眼を快にせざるはなし。汽車アユチャに達すれば、先づ奉迎使を知事邸に請して朝餐を供して後、メナン河を溯りし野象を捕捉する所を見る。パンハインの離宮に赴き宮殿を巡覧するに、楼台殿廓悉く異材奇石を畳みたる宝館ならざるはなし。

正午同宮にてチフィンの餐あり。再び汽車にて盤谷に帰る。

十八日晴、午前八時在留日本人の請により、当国にて死亡したる不幸なる同胞の為にワットサムチンにて読経回向す。帰途、公使館にて会議あり。大谷派の發議にて印度仏跡参拝を中止す。午後一時奉迎使は公使館に至り、同二時宮内省差回しの馬車にて王宮に赴き、宮中の第二門にて下車し休憩室に入れば、宮内大臣、

文部大臣之を迎へて握手先導して謁見室に入らしむ。皇帝即ち出御ありて握手挨拶あり。奏樂の音と共に宮内大臣先導にて皇帝と伴ふて食堂に入る壯麗言ふべからず。当日陪食の席次左の如し。

文部書記				外務書記官	
侍從武官		藤 島		侍從武官	
宮内次官		田 前		日本公使	
文部大臣		宮 内		玉 座	
谷 大		文部次官		内務大臣	
文部次官		條 南		日 置	
外務次官				侍從武官	
		食卓		侍從武官	
		式部官			

喫食の間奏樂を大めず、大なる羽扇を以て風を送る。食了りて更に宮内大臣先導して別室に入り、大仏像を日本仏教各宗に寄贈せられ、小仏像を大谷派へ賜はりて後、皇帝は奉迎使に向て仏前にて読経せんことを望まれたれば、大谷、藤島二師は偈文を誦し、前田、日置二師は心経を誦して後、舍利礼文を三唱三拝しけるに、陛下龍藤顔麗はしく告別の勅を宣し給ふて曰く。

日本仏教各宗派が協同一致して神聖なる釈尊の遺形を奉迎することは、奏樂の甚だ喜ぶ所なり。将来益其協同力を堅固にして有益の事業を興起し、宗教上の利益を普通ならしめ、最初の朕念を貫徹するを計らるべきは、同一宗教を信奉する朕の希望する所なり。奉迎使は既に此地に於て為すべきことは悉く作し了れり。今後は我宗教の益日本に於て隆盛に赴くべきこと信じて疑はざるなり。尚今後各宗派の協同一致して布教の策を計画す

るが為め、助力を要すべきあらば、朕は如何なることをも辞せざるべしと貴師等に約束す。

今日朕が日本仏教徒に寄贈する所の仏像は、這回郷等が受領せし釈尊の遺形安置の所に同じく安置せらるべし。

王后よりも三蔵聖教の写本を寄贈すべき筈にて、之を入れるべき錦囊を手製中なれば、後日差送るべし。

御遺形は大切に護持して無恙本国に帰着し、速かに奉安所を定めて之を尊敬せらるべし。尚海路平安諸師建全にして帰国せられんことを望む。

かくして皇帝入御の後、奉迎使は各大臣と袖を分ちて還る。

此夜九時半、日本公使館にて夜会あり。各国公使、文部大臣、在留日本人等来会するもの七十余名にして奏楽あり、煙火あり、立食の饗あり、暹羅の演劇ありき。

十九日晴、午前十時公使館に集りて帰航の準備をなす時に、皇帝陛下あり。金銀銅三種の紀念章を奉迎使へ贈与せらる。又文部大臣より仏像一軀宛一行の僧侶に贈呈せられたり。

正午公使館に於て午餐の後、直ちに出發して独乙メールなるコーラット号に搭す。文部大臣、稲垣公使、同夫人、書記官、在留日本人等送りて本船に來りたり。午後二時解纜し、始めて帰朝の途に上る。

廿日晴、午前九時船はメナン河を出てコースイチヤンに碇泊し、貨物の積込をなし、午後九時再び出帆す。

廿一日、終日石尤怒り、海若叫び波濤躍りて船を越ゆ。

日置黙仙と忽滑谷快天よりみた仏骨奉迎

廿二日晴、

廿三日晴、馬來半島の群山を右舷に見るを得たり。

廿四日晴、午後四時新嘉坡に帰着し、大谷派はラフレスホテルに投じ、日置、前田二師は日本旅館に、藤島氏は西本願寺布教所に投宿す。

廿五日晴、印度回航の議再発したれとも亦復中止となり、藤島氏は仏国に渡航することに決定しぬ。

廿六日晴、午前八時に逆旅を出て植物園を見んとて、行く園は広潤なる丘陵状の平地にして無数なる熱帯地方の草木を集めたり。園の中央には多くの動物を飼ふ。猩々あり、人に馴れて見物人と握手して遊ぶ。いと面白かりき。

廿七日晴、中山領事來訪して日本船神奈川丸にて帰国の旨を告げらる。一行は三十日発の英船に搭するの前約ありて同行する能はず。

廿八日晴、釈種樸仙氏の案内にて、新嘉坡水道儲水地を一見し博物館を縦覧す。午後一時西本願寺布教所にて南條、藤島、日置三師の法話あり。

廿九日晴、午前九時、釈種樸仙氏を其住宅に訪ふ。午後四時、二木多賀治氏の請により晚餐を享く。

三十日晴、午前八時出發。九時英船マルタ号に搭す。

七月一日午前六時拔錨、二日晴、三日晴、四日晴、

五日晴、午前九時香港に帰着す。午後二時在留日本人歡迎の為め、小蒸氣船に大國旗を掲げて來り一行を乗せて上陸し、直ちに

轎にて香港劇場に入り、暫時休憩の後、在留日本人一同に向ふて前田氏より挨拶あり。南條師の法話ありて開散し、奉迎使一行は日本旅館にて日本料理の饗を受けて帰船す。

七日晴、清国紛乱の報頻りに到り、上海に上陸するは一行の爲め不可なりとて寄港を中止し、午後十二時半英船ロヒラ号に転乗して長崎へ直航することに決す。午後五時ロヒラ号香港を抜錨す。

八日晴、九日晴、十日晴、

十一日大雨、午前九時半長崎着。煙火にて着船の報あれば、予て滞崎中なる奉迎委員一同は、小蒸汽船に六金色の旗を掲げて来り一行を迎ふ。乃ち聖形を納めたる箱を錦衣にて纏ひ、黒塗の輿に入れて奉迎委員小林栄運、有馬憲文、三原俊栄、名和淵海の諸師之を擔ひ、午前十一時大波止場に着し、一行は仏輿に供奉して順路皓台寺に向ふ。九州各地より来崎したる僧侶信徒数千名の多きに及び市中紛雜名状すべからず。

正午仏輿皓台寺に着すれば、本堂正面の仏壇上に安置し、読經供養ありて後、奉迎使より一同の僧俗に挨拶あり。午餐の後、一行は旅館迎陽亭に投宿す。午後大雨。

十二日晴、午前八時仏前にて日蓮宗の法要あり。九時よりは真宗各派十一時より浄土、時宗等の法要を行ひ、富永寛成氏の演説あり。午後三時より曹洞、臨済等の法要ありて、前田誠節師の法話あり。四時より真言、天台等の法要を行ひたり。此日、皓台寺に参集したる信徒は無慮一万と註せられ、昼夜煙火を風頭山にて打揚げたり。

十三日曇天、大法要順次左の如し

八時より真宗各派

九時より臨済曹洞等

十一時より浄土宗時宗等

三時より真言天台等

四時より日蓮宗

此日、午前星野仙梁氏演説し、午後南條文雄師の演説ありて、参聴者堂内に溢れ如何ともすべからず。煙火例によりて昼夜止まず。十四日曇天、大法会順次左の如し。

八時より真宗各派

九時より臨済曹洞黄檗

十時より真言天台律

十一時より浄土時宗等

三時より日蓮宗

午前曹洞宗の長源無功氏の演説あり。午後日置黙仙氏の説教にて、聴衆は例によりて堂の内外に充ち煙火前日に異らず。

午後七時奉迎使及び各宗派役員地方寺院惣代の茶話会ありて、先づ日置氏暹羅事情より説き起し、大菩提会に對する希望を陳べ、次に奉迎委員起ちて大菩提会の主旨を説き、前田誠節氏亦仏骨授受の模様より同会の盛大を切望する旨を演じ、それより茶菓を喫して散会す。当日の調査によれば、大菩提会入会者千有余名に達したり。

十五日曇天、午前八時各宗僧侶参集、九時各宗連合読經、十時奉迎使行参拝、十一時奉迎供奉順序整列、十二時出興停車場に向ふに、九州各地僧侶信徒奉送のもの雲霞の如し。斯くて聖形上陸会は局を結び、順路京都に入る。此間の事實は諸新聞紙の評説する所なれば再録せず。

(完)